

こうほう ショッキング

Vol.35

Kōhō shocking



やま ね たか よし
山根 高義さん

●プロフィール

44歳。厳原町久田道出身、久田在住。対馬高校を卒業後、1年間大阪で働き帰郷。鮮魚の運搬・販売の会社で働き、17年前から自営。3人の子どもは現在島外で生活。昨年立ち上げた対馬ウォーキング協会の会長を務める。高校生の時から始めた空手は6段。厳原町の日新館で道場を開き、週2回、小中学生約20名が集う。

○空手をはじめたきっかけは？

男ですから、ケンカが強くなりたいという程度の理由でしたね（笑）。当時高校に空手部があつて、見学のつもりがその日からさせられて、辞めるに辞められずに続けてきて。

そんな中で続けて良かったなあと思えるのは、何というか、空手が生き方そのものなんです。仕事相手とのやり取りにしても、空手と共通する部分がとても多いんです。行き際・引き際は勝負には大事ですし、気配り目配り心配りというのは、空手を通じて覚えたことですね。それができて強くなる。強さというのは日常生活に全て現れます。

子どもたちに空手を教える時「迷ったら進みなさい」と言うんです。考え方も生き方も、挑戦とは闘うこと。仕事も同じです。仕事のことですっきりしない時でも、道場で子どもたちに向かうと、気が張ってもう一度立ち上げられる。生徒のおかげで立たせてもらえるという感謝の気持ちがあります。空手は切っても切れない、生涯続く生活の一部です。

○震災からちょうど1年。震災直後に物資を運ばれましたね。

商売の知り合いが被災地に入ったというのもあるんですが、私としては普通にしていたことをただやっただけなんです。震災だったからあたかも大きいことをしたように聞こえる気がしますが、特別自分の意識の中で何があるかも！という思いは正直ありませんでした。

○行動することもそうですが、心の持ちようも空手に通じているのでしょうか？

空手って、永遠に矛盾なことをしているんです。本来の空手というのは、自分や家族、殿様を守るために相手を殺すことから始まったんです。だから本来は使わないのが一番いい。使い方を間違えたとんでもないことになるけれど、うまく使うと良いものになる。自分がいるんなものに耐えて今までしてきたことを、今こそ使う時に使わなくて何になるのか。誰か一人でも人助けになれば。お世話になつてきた東北に自分がすぐできることは、今この平和な対馬から物資を集めて持っていく、ただそれだけでした。自分が普段していることをどうやってうま

く利用するか、そこに利害も何もない、今必要とされていることを今やる、困っている時に困っている人を助ける、それが人助けだと思っんです。

○私たちが今でも被災地にできることは？

被災地の人がどういった生活をしているか、行って見てくるだけでいい。そこには、這いつくばってでも立ち上がっているうとする人たちの気持ちがあるから素晴らしいんです。日本中の普通に生活できている人はその気持ちを持って、自分の生活を、地方自治をしっかりとやって、財政が安定して被災地の復興が進むという形が一番良いのではと思います。私たちが被災地から学ぶことは、そこから立ち上がっていく人たちの心の部分だと思えます。向こうの人たちには負けない、という思いです。

現地を見てきた者として思うのは、私たちは「忘れず、思うこと」が大事だと思うんです。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。次回は豊玉町千尋藻在住の原田洋光さんです。お楽しみに。